

私と異文化理解

千葉県立流山おおたかの森高等学校 二年

須長 すなが 恵光理 えみり

授業参観に来た父親と高校生の娘が、会った瞬間にハグをする。そんな光景を目にした時、皆さんは動揺しますか。私にはアメリカ人の母と日本人の父がいます。私の家ではハグという行為はとても身近なものです。朝起きて顔を見合わせた時、家を出る時、帰宅した時、いつでもどこでもハグをします。私にとって、ハグはあいさつや愛情表現のようなものです。特に両親は、私が気を張っている時には、意識的にたくさんハグをしてくれます。私は両親からハグをされると心からリラックスし、やる気がみなぎります。しかし、ハグは日本では一般的な行為ではないため、周囲の目を気にする年齢になってからは、家の外でハグをすることはなくなりました。テストの成績が良かった時、体育の競技で点を取った時など、ハグをしたくなる衝動を抑えることが当たり前になりました。しかし、私は高校入学後に、授業参観に来てくれた父とクラスメイトの前でハグをしました。家の中同様に自然

とハグができたのは、高校のクラスの環境が大きいと思います。

私は流山おおたかの森高校の国際コミュニケーション科に通っています。国際コミュニケーション科は外国籍の生徒も多く在籍しているため、様々な文化や価値観と関わる機会があります。そのためクラスメイトは、私が父とハグをしたときにも、特にぎよつとした反応もせず、温かい目で見てくれました。国際コミュニケーション科は、入学してすぐに、海外留学生から英語を教わりながら「異文化」について学ぶ、イングリッシュキャンプという宿泊研修があります。キャンプ中は、留学生が日本に来た時に感じた母国との文化の違いをたくさん話してくれました。例えば、海外では電車内で隣の人に声をかけて雑談が始まることは当たり前なのですが、日本で同じことをすると警戒されてしまいます。食事面も同様です。欧米ではコーヒーや牛乳にパンを浸して食べるのは一般的ですが、日本ではマナー違反のように受け止められてしまいます。日本で当たり前のことが他の国では驚かれることであったり、また反対に、日本で見たことないものが違う国では当たり前であったりと、異文化について多く学び、自身の価値観を広げることができました。ただし、学んだだけで終わりではありません。国際コミュニケーション科は、多

様な価値観を持った人たちが同じ教室で学ぶため、その学んだことをもとにお互いに気を遣い合ったり配慮したりと実際に行動に移すことが必要になってきます。私のクラスではラマダンの時期になると、その生徒の前でお昼ご飯を食べないように心がけたり、肉の話をしないなど、その人のために自分たちができる配慮をし、なるべく気持ちよく過ごせるようにしています。これはお互いの宗教や文化を尊敬し合っているからこそその配慮です。そのおかげでみんながより仲良くなり、お互いのことを考えながら成長することができています。

現代は、インターネットやSNSが発達し、海外との距離が年々縮まっています。当然「異文化理解」も求められます。私は、国際コミュニケーション科の友人たちと過ごしていく中で、「異文化理解」に必要なことは二つあると考えました。一つは、「相手の文化について深く知り、その文化を受け入れる」ことです。受け入れるということは、先ほどのラマダンの話にもあったように、相手に対して尊敬の気持ちを持つという意味も含まれています。二つ目は、「自分の当たり前は当たり前ではないということに気づく」ことです。異なる価値観を持っている相手に、自分の当たり前を押しつけてしまったり、相手を本当に理解することはできません。まずは対話を通して、相手の思いや価値観を探ることが大切なのだと思います。

います。直接的に異文化に触れている人たちだけではなく、一人ひとりがそれぞれの価値観に目を向け、多様性の輪が広がっていくことを願います。